

むかし神田神保町の古本屋で一冊の本『CACHEMIRE』が目にとまった。イタリア語版のため原稿は読めないながらも、圧倒的な図版に心を奪われて購入した。そのなかから図1を載せる。この吸い込まれるような感覚は何だろう。イスラムの幾何模様のベクトルが天空を指すならば、こちらの模様のベクトルは生命体の内奥を指すとも言いあらわせる。その後、この本の翻訳版『カシミア・ショール』モニク・レヴィストロース著(平凡社)も入手し、その他文献やネットなどでカシミア・ショールのこと、そしてペイズリー柄のことが少しづつわかってきた。

インド北部のカシミール地方に生息する野生のヤギの毛からは、世界的にも最上質な毛織物が紡ぎ出される(今日カシミア/パシュミナと呼ばれている)。1379年、ペルシアから訪れたサイド・アリ・ハマダニという人がこの高品質な繊維を発見して同行した熟練技術者に織らせたという説や、15世紀にカシミア地方のスルタンであったザイン・ウル・アビディーンがトルキスタンの紡績工を宮廷に呼んで作らせたという説があるが、産業を決定付けたのはムガル帝国中興の祖アクバルである。ちなみにムガル帝国という名前はモンゴル人の帝国を意味するもので、創始者バーブルはウズベキスタンに生まれた。そしてムガル帝国を最も繁栄させたのが3世のアクバルで、文化芸術にも力を注いだ。この時代にカシミア織物にも技術革新がもたらされ、ブータと呼ばれる花柄も取り入れられ、王室や貴族たちにも愛用されるようになった。また国の外交においても人気の贈答品となり、英国女王にショールを贈った記録も残されている。18世紀半ばには英国ビクトリア女王やフランスのジョセフィーヌ皇后が好んだことで上流階級にブームを起こして、産業革命の織機によってフランスやイギリス国内でも大量に作られるようになった。

実はヨーロッパにおいては15世紀頃からオリエント産の織物が王室や貴族に入り込んでいた。当時の王族たちがアラベスク風の織物を誇らしげに纏った姿を画家に描かせて肖像画として残していることから、オリエントの毛織物は権力や富の象徴でもあった。

18世紀に入り込んだカシミア・ショールは、最高品質の毛織物もさることながら、アラベスク風とは異なる独特なデザインにも大きな魅力があった。それがブータと呼ばれる花柄である。それがやがてペイズリーと呼ばれるようになる話は次回にすると、ここではデザインもヨーロッパ(主にフランス)でするようになったことを述べておきたい。豪華さを競い合うかのごとくデザインが緻密かつ洗練していった。その結果が図1や2の見事な長尺ショールであり、この鮮やかな赤はヨーロッパで開発されたマゼンタ染料による。



図.1 パリの製造者リオン・フレール作の長方形ショール
『カシミア・ショール』モニク・レヴィストロース著(平凡社) P.143



図.2 クリノリンスカートのペイズリー模様。1865年
<http://www.victoriana.com/Shawls/paisley-shawl.html>

カシミア・ショールには特徴的なデザインがある。あの涙型の形状である。イギリスではコーンやパイ、フランスではパルム、ウィーンでは小さな玉葱などの愛称をいただく一方、ゾウリムシやミドリムシとも揶揄されている。この形状の起源をさぐると、インド・ムガル朝の花模様ブータ (boteh) がひとつの目安としてあげられている。その模範例に 16 世紀にインドのラジャスタンに築城したアンバール城のファサードの図 1 がある。そしてわずか 100 年後にはペルシアの皇帝の王冠やガウンなどに今日お馴染みの涙型形状があらわれる (図 2、3)。この図 1 と図 2、3 の間の変遷については、1993 年に渋谷区立松濤美術館でおこなわれた特別展「ペイズリー文様の展開—カシミアショールを中心に」の図録にそれなりに納得できる図版が載っている。私の手元には白黒コピーしかないので掲載は割愛させていただくが、この 100 年の間にペルシアで涙型形状が決定付けられたと考えてよさそうだ。

ペルシアといえば古代より織物の一大産地で、ムガル朝の流行をいち早く察知して逆に売り込むほどの進取の気風や高い産業力を持っていた。図 4、5 では、ペルシアでテルメ (Termeh) と呼ばれる織物で、あの涙型形状が織り込まれている。そして 1808 年、フランスのジョセフィーヌ皇后の衣装に登場してくるのである (図 5)。

ヨーロッパの王室や上流階級の間でこのカシミア・ショールが流行したが、高価だったので庶民に手にはとても届かなかった。そのため安価なイミテーションが生産されるようになった。産地としてはイギリスではエジンバラ、ノリッジ、ペイズリー、そしてフランスではリヨン、ニームでイギリスと張り合っていた。1801 年、フランスのジョゼフ・マリー・ジャカールが自動織機を発明した。それが今日でもジャカード織機と呼ばれるもので、デザインをパンチ穴でデータ化できる画期的なマシンであった。折しも産業革命の真っ只中で、このジャカード織機が豊富なデザインを多色で量産可能にした。産地競争ではイギリスのペイズリーが他を引き離して、この模様のイミテーションを大量生産したおかげで、この模様そのものもペイズリー模様といわれるようになってしまった。

ペイズリー柄の名称を決定付けたのはアメリカでのバンダナであろう。ジョージ・ワシントンはじめカントリーシンガーのウィリーネルソン、はたまたギャングに至るまでペイズリー柄のバンダナ使用が国民に広がった。これはペイズリー柄のファストフード化といってもよく、もはや誰も特別な関心を払わなくなったが、それでもペイズリー柄は微生物のように環境に適応しながら現在でも生き続けている。



図 1. アンバール城ファサードのポータ



図 2. ガージャール朝ファトフ・アリー・シャー (1797 年 - 1834 年)



図 3. ガージャール朝ムハンマド・シャー (1836 年 - 1848 年)

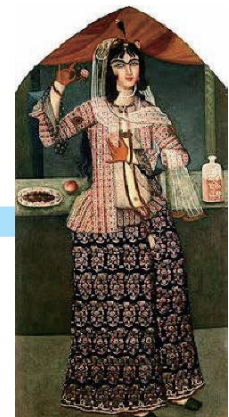


図 4. ガージャール朝の貴婦人



図 7. ペイズリー博物館とジャカード織機



図 6. ブータ模様で着飾るジョセフィーヌ皇后 (1808 年)

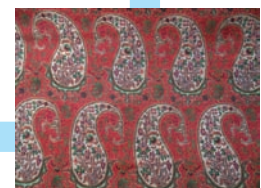


図 5. ペルシアの織物テルメ (Termeh) の Boteh-Jegheh パターン。